ネクタイをした男の顔

自動的に生成された説明写真が入ります

地域がん医療を推進する次世代病理診断医育成コース責任者

黒瀬　顕

（病理診断学講座　教授）

　がん医療における病理医の役割には，病変の正確な診断は勿論，治療選択の上で重要になる様々な組織情報の提供，さらに新規治療法や治療薬による効果判定や副作用の解明等が挙げられます．

　腫瘍性病変の正確な診断のためには，今では病変の病理組織学的観察のみでは不十分であり，遺伝子をはじめとする様々な分子病理学的解析結果を加味した病診断が必須になってきました．本学病理診断科では最新のがん病理診断を行うために病理医に加えて分子病理学的解析を専門に行うスタッフを揃え，教室独自に専門性の高い解析を行い，組織診断に分子病理学的解析結果を加味して総合的な病理診断を行う体制を整えています．分子病理学的解析では免疫組織化学による変異蛋白の検出，組織切片を用いたFISH法やDNA抽出による遺伝子解析，新鮮検体からのRNAやDNAを用いた遺伝子解析を行っています．このように病理診断科独自で分子病理学的解析を行って病理診断に反映している施設は全国的にも稀であり，今後のがん治療を行う施設での病理診断科のモデルとなるでしょう．特に，術中迅速診断では病変の診断のみならず，腫瘍組織が得られていることを確認した後に分子病理学的解析のために凍結検体を保存することに力をいれています．このように解析検体の質を確保することも病理ならば出来ることなのです．

　また新規治療法や治療薬は，その効果のみならず，副作用をも組織学的に調べる事はいつの時代も重要であり，手術検体による検索や，不幸にして患者さんが亡くなった際には病理解剖をご家族にお願いし，それによって効果と副作用を調べ，得られた所見を蓄積して発表し，将来の治療に役立たせていくことも病理医の使命です．

　本学病理診断科では種々の腫瘍診断が治療法選択のために相応しい最新最善のものとなるように，分子病理学的検索を踏まえて病理診断を行っていることが最大の特徴です．このような環境で，一緒に病理組織を観察し，分子病理学的データを解析することで更に組織観察に意味を加え，医療に役立つ病理診断を目指して研鑽しましょう．